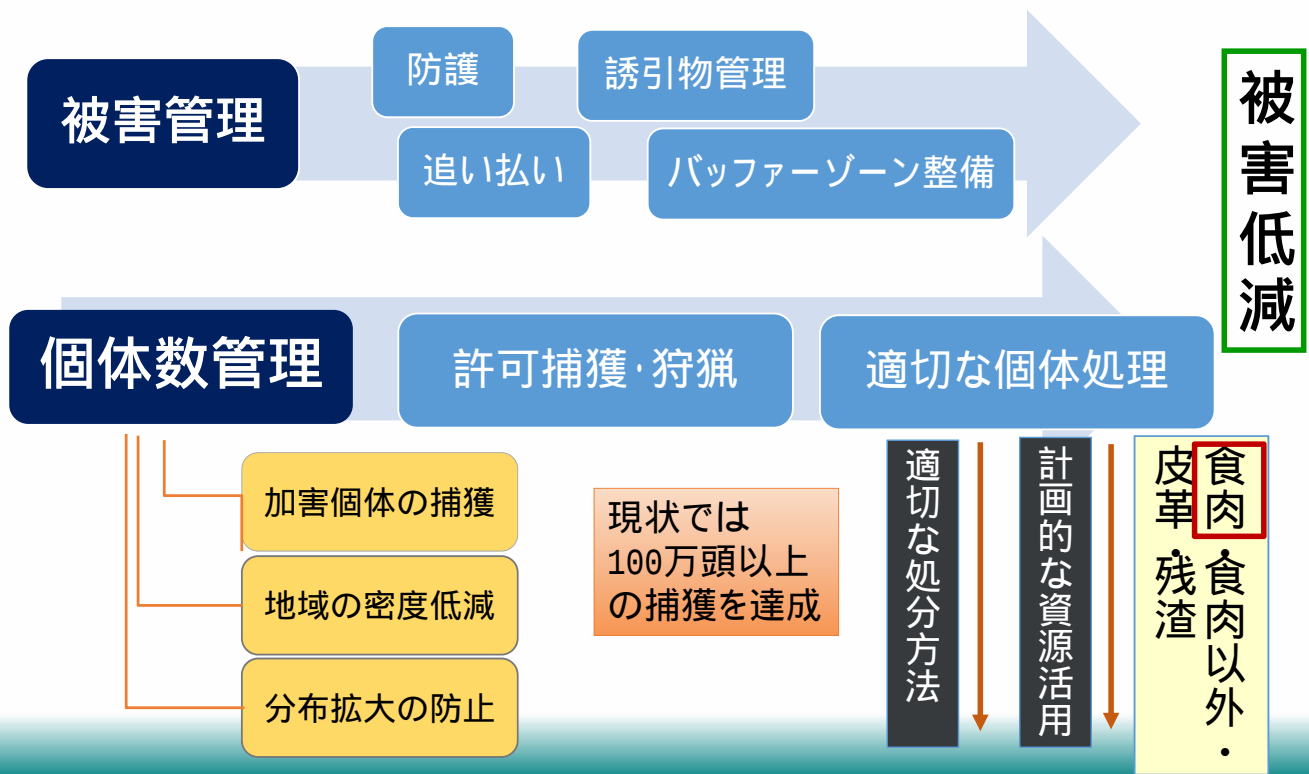


ジビエ利用に求められる 資源管理のプロセス



兵庫県立大学・森林動物研究センター
横山 真弓

被害管理とジビエ利用の関係

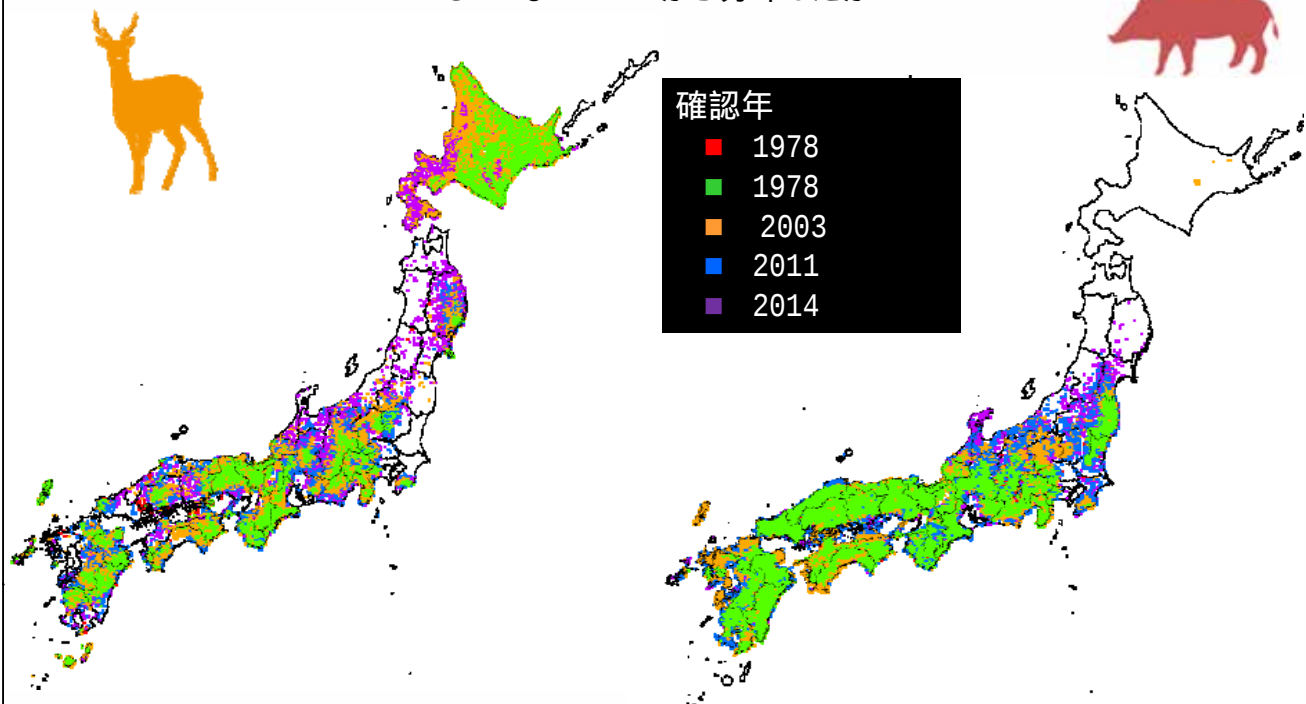


ジビエ利用（食資源）に求められる 基盤とプロセス



最新のシカ・イノシシの分布図

いる・いない・いつから分布したか

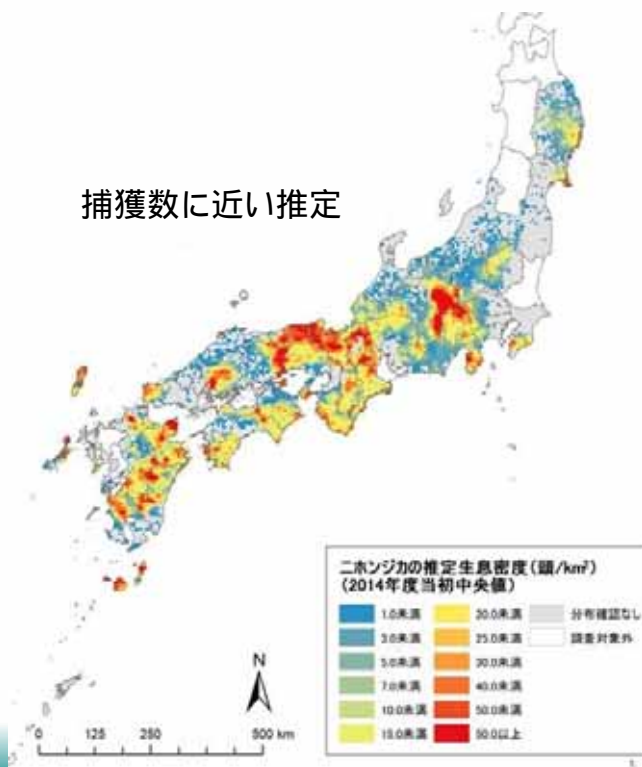


ニホンジカの推定生息密度 (環境省)

資源量把握のために

1. どこで・どのくらいの捕獲が必要か？
2. 被害低減のための目標と資源確保は両立するのか？
3. 捕獲時期による被害低減効果と資源性価値の変動は？
4. どこに施設を配置すべきか？

捕獲数に近い推定

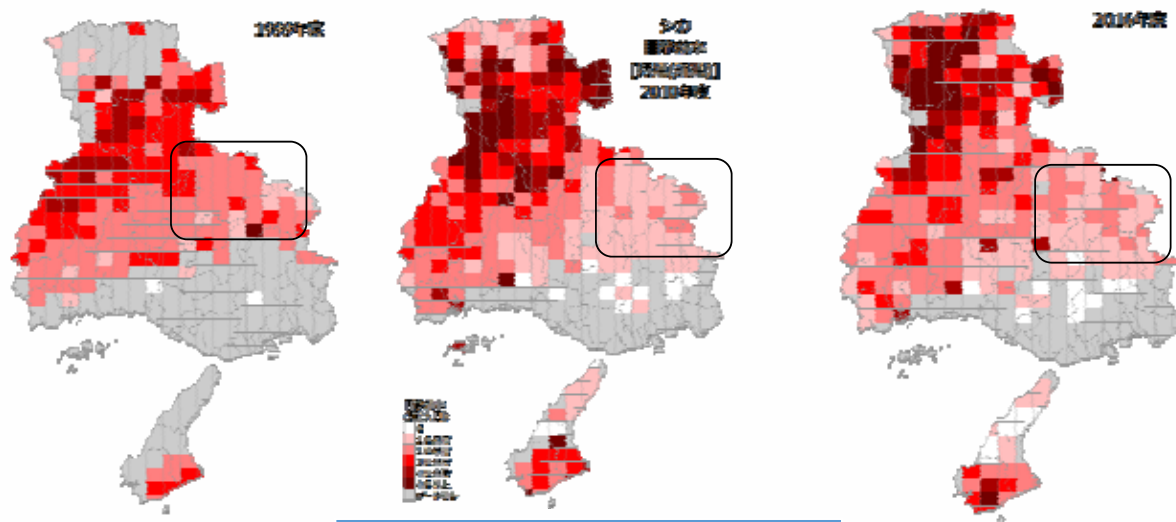


これらを判断するためのデータが
圧倒的に不足

兵庫県におけるシカの密度分布

◆ どこでどれだけ増えているのか、減っているのか？

目撃効率・捕獲効率・糞塊密度調査

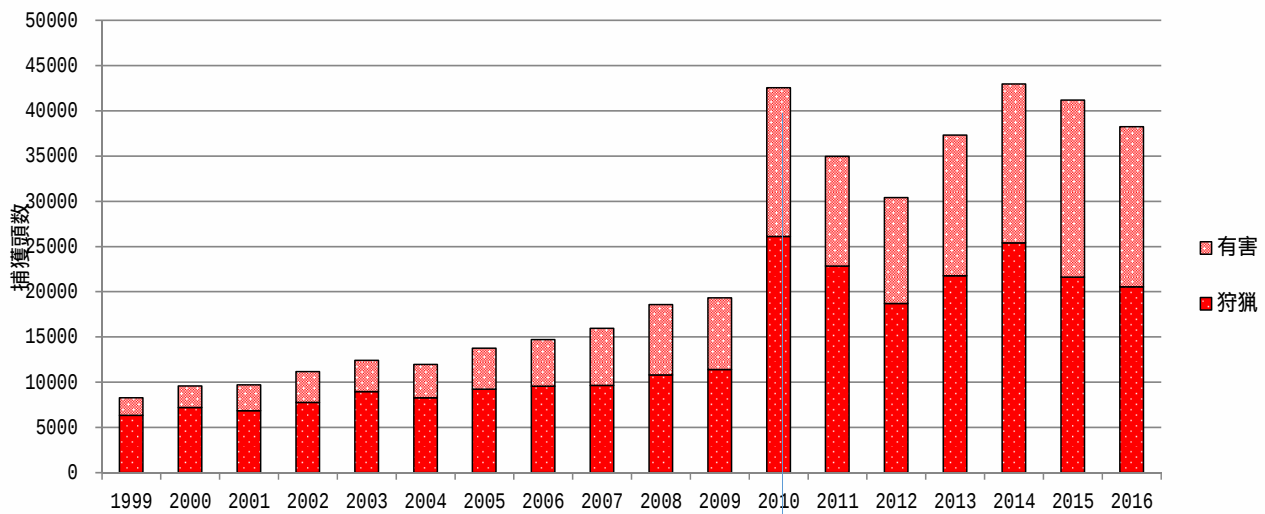


分布状況は常に変動する

捕獲状況

狩猟 + 有害

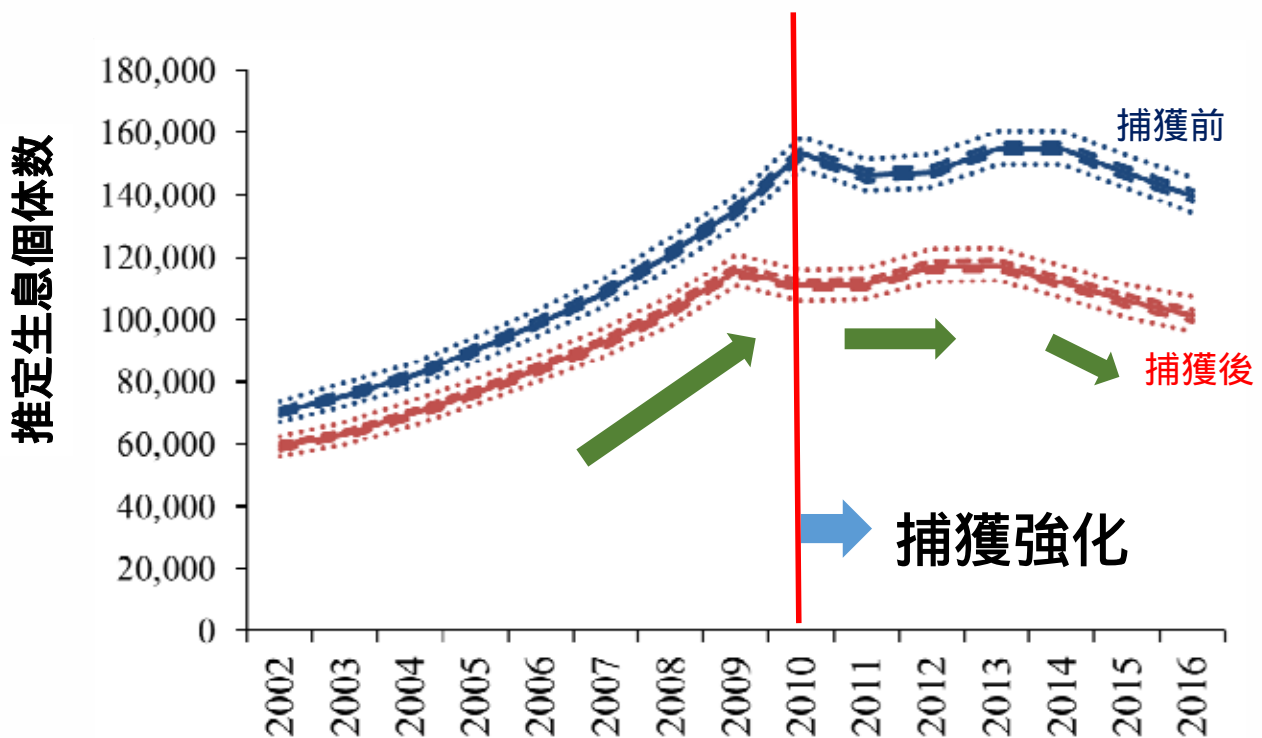
各年度における捕獲状況(本州 シカ)



2010 ~ 捕獲強化
その後個体数は？

7

捕獲強化後の推定個体数の推移(本州部)



2010年以降、減少傾向へ。

8

地域で異なる個体数の変動

減少化

高密度化

捕獲体制がない

密度低下への対応は？

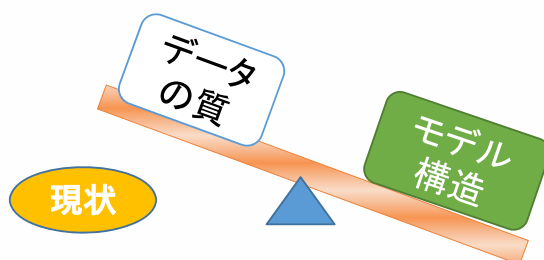
資源化には向く地域？

新規侵入

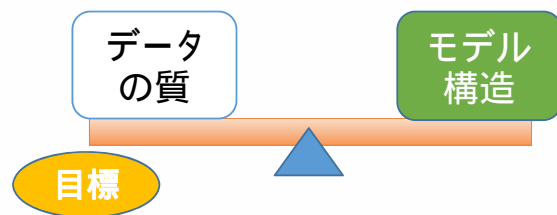
資源化を事業とするためには、空間的な生息数の可視化は必須

9

個体数推定モデルとデータの関係



モデルの複雑さに対し、データが不足



モデル構造に見合うデータセットの確保

個体数推定に求められるのはモデル構造だけでなく、データの質と量



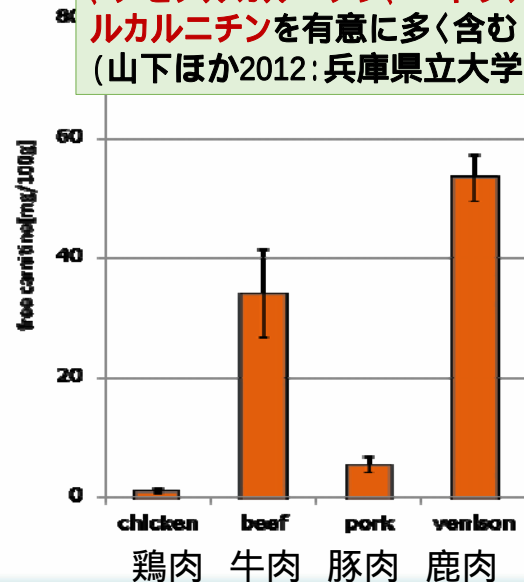
密度指標や捕獲データを集めるシステムが必要

現実の課題

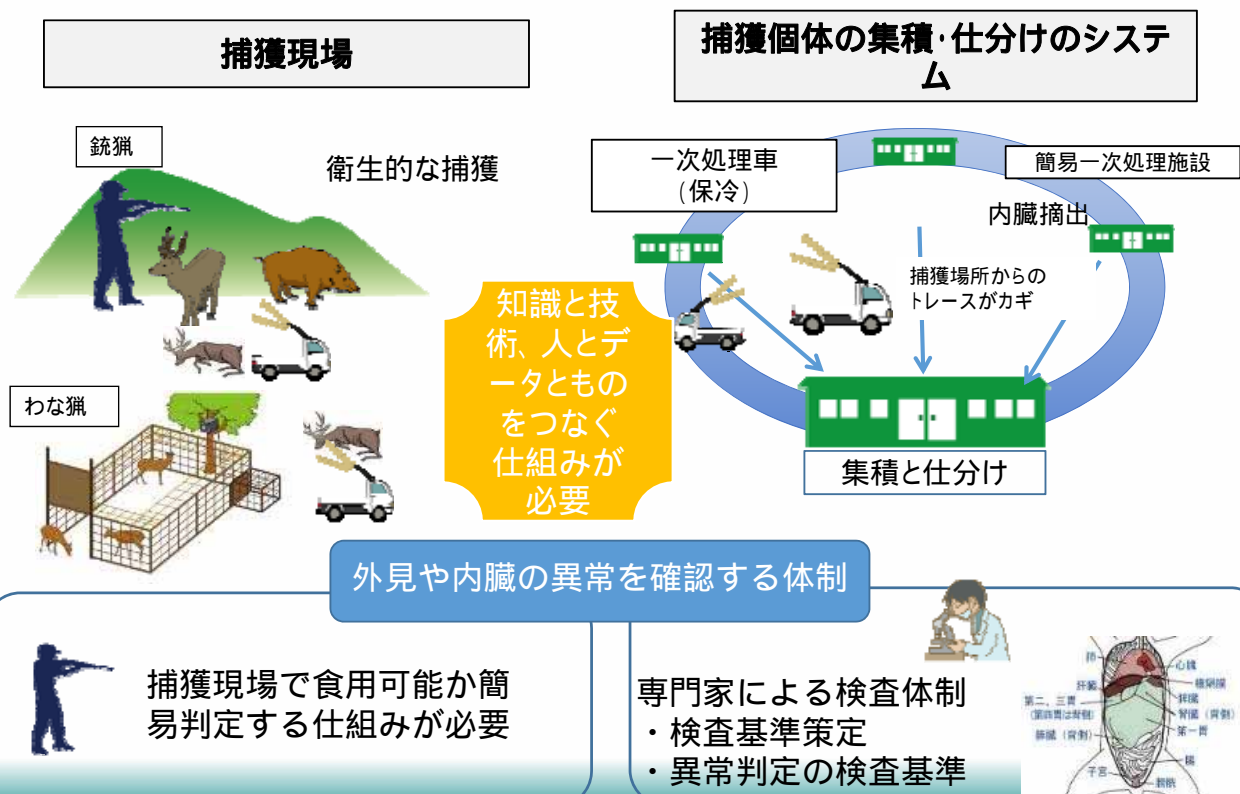
～資源として価値の高いシカ・イノシシを食資源とするために～

- 獣害が深刻な地方行政では、人員削減が深刻。
- データ入力のしくみを構築しても現状では、データを入力しない状況が続いている。
- 一部地域で入力されないと、都道府県単位での推定が困難になる。
- 食肉としての研究もごくわずか。畜産物と同様の扱いでは、価値を見逃す。

シカ肉は、牛肉・豚肉・鶏肉より、**機能性アミノ酸**である**遊離カルニチン**、**アセチルカルニチン**、**ヘキサノイルカルニチン**を有意に多く含む
(山下ほか2012:兵庫県立大学)。



捕獲から精肉、感染症・衛生管理システムの構築



資源化へのプロセスの課題

- 漁業と同様に資源量を把握しながら利用する資源管理が必要である。
- どこで・どのくらい・増えているのか・減っているのか・いつの時期に何キロの個体が捕獲されやすいのか。
- 捕獲時の損傷率や肉の歩留まりなど個体差がどの程度あるのか、食肉量や廃棄量はどの程度か。
- 被害を押さえるほど低密度化した場合、事業として成り立つ捕獲数が確保できるのか。
- 天然資源としての付加価値をどの程度つけられるのか？